幸野楳嶺『代毫記』（土居次義氏旧蔵）の美術史学的位置
――美術史学のアーカイブ構築へ向けて――

多田羅多起子（京都造形芸術大学）

昭和の美術史家たちは、当時数多く発行されていた美術雑誌等の発表媒体を持ち、幅広い領域を対象に、概説や紹介文、随想など頻繁に発信していた。学術誌とは性質の違うこれらの媒体で取り上げられた題材の中には、その後の研究に十分活用されていないものも含まれる。現在、田中一松氏の研究資料（東京文化財研究所）、相見香雨氏の調査記録（九州大学文学部）など、昭和を代表する研究者の調査資料寄贈が各所で行われ、整理作業が進められている。加えて、資料保全と有効活用のため、美術雑誌の情報共有に向けた動きも見られる。これら各機関での個別データベースの横断的利用が可能になれば、専門領域が細分化された現在からはつながりにくい情報を研究者が共有し、再び美術史の舞台にあげることが可能となる。本発表では、そのような美術史学のアーカイブから生まれ得る成果の一例として、土居次義氏旧蔵の幸野楳嶺資料を紹介し、その美術史学上の意義を明らかにするとともに、美術史研究者の収集資料を研究することの意義も合わせて考察したい。

日本絵画史において、土居次義氏（1906-91）の研究は、狩野山楽・山雪、長谷川等伯に関する成果を筆頭に、近世絵画の広い領域に及ぶ。加えて、2009年京都工芸繊維大学に寄贈された研究資料一式を整理する過程で、旧蔵資料の中には、近世にとどまらず近代絵画に関する重要なものも含まれていることが判明した。幸野楳嶺（1844-95）自筆による『中嶌先生鑒證代毫記』（以下、『代毫記』とする）はその一部である。『代毫記』は、1951年、土居氏によって発見され、『茶道雑誌』誌上に紹介文が掲載されている（後に『近世日本絵画の研究』（美術出版社、1970）収載）。しかしながら、管見の限り、その後の楳嶺研究において本資料には言及されていない。

『代毫記』は、師・中島来章（1796-1871）の命で、楳嶺が助筆、代筆および代稿した作品の目録である。明治4年、来章が没して2ヶ月後に記された楳嶺の序文によれば、来章からの厚い信頼に恩義を感じつつも、事実を子孫に伝えるために敢えて記録を残すという。文久元年から明治2年までの9年間、書き連ねられた作品は総計289点に及び、画題、材質、制作日が添えられる。晩年の来章が弟子の助けを借り楳嶺もそれに加わっていたという記載は後の楳嶺伝等にも見えるが、本資料はそれを裏付けるものであり、来章晩年、そして20代の楳嶺の様式に新たな視点を持ち込むものである。また、来章と楳嶺という特定の師弟関係のみならず、当時の絵師たちの制作状況を考察する上で重要な示唆を与える。さらに、列挙される300点近い記録は画題、装丁とも多岐にわたり、幕末から明治初年という京都画壇激動の時代における、画事の受注状況を詳らかに示している点でも大きな意味をもつ。『代毫記』を通して、近世的な画技をもち近代的な芸術家の立場に置かれつつあった楳嶺の絵画史的位置を明らかにすることができた。